

知的障害のある児童生徒の セクシュアリティの学習ニーズ — 自主シンポジウムでの養護教諭の語りから —

高田 千鶴・大関 智子*・中谷 和子**
平木 真由美***・関口 久志・郷間 英世****

The Learning Needs of Children with Intellectual Disabilities in relation to Sexuality Education
—Speech and Thought Presentation of Yogo Teachers at an Independent Symposium—

Chizuru TAKADA, Tomoko OZEKI*, Kazuko NAKAYA**
Mayumi HIRAKI***, Hisashi SEKIGUCHI, Hideyo GOMA****

Accepted April 28, 2017

抄録：本研究の目的は、知的障害のある児童生徒のセクシュアリティ教育に関する学習ニーズを把握し、児童生徒のためのセクシュアリティ教育の基礎資料を得ることである。対象は、知的障害のある児童生徒に対し、セクシュアリティ教育の授業を行ったことのある3名の養護教諭である。方法は、事例コード・マトリックスを用い、201X年、教育関係の学会の自主シンポジウムで、知的障害のある児童生徒のセクシュアリティ教育に関する学習ニーズについて発表した養護教諭3名の語りを分析した。その結果、恋愛について（多様な性を含む）、コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）等の多様な潜在的学習ニーズがあげられた一方で、人との関わり方について等の顕在的学習ニーズをあげたのは1名と少なかった。今後は、児童生徒を対象にしたインタビュー調査等により、顕在的学習ニーズを明らかにした上で、学習・支援の検討が必要である。

索引語：知的障害のある児童生徒、セクシュアリティ教育、学習ニーズ

Abstract: The purpose of this study was to understand the learning needs of children with intellectual disabilities (ID) in relation to sexuality education, and to obtain the basic data for sexuality education for such children. The study subjects comprised three Yogo teachers, who have experience of giving lectures on sexuality education to children with ID. The method used was the case-code matrix, and our analyses focused on the subjects' oral presentations in relation to the sexuality education learning needs of children with ID, given at the independent symposium of the Academic Society of Education in 201X. The results were as follows: the issues of romance (including various sexualities) and communication skill (including interpersonal distance) were raised as potential learning needs, but only one teacher raised the issue of overt learning needs such as how to interact with other people, etc. In the future, we will consider learning and support to reveal more overt learning needs through an interview survey with children.

Key Words: children with intellectual disabilities, sexuality education, learning needs

* 東京学芸大学附属特別支援学校

** 京都市立東山総合支援学校

*** 元：京都市立西総合支援学校

**** 姫路大学大学院看護学研究科

1. はじめに

セクシュアリティ教育の国際的な動向として、ユネスコ、国連合同エイズ計画（UNAIDS）、国連人口基金（UNFPA）、WHO、ユニセフおよび世界中の数多くの性教育の専門家によって「性教育国際指針（International Technical Guidance on Sexuality Education-An evidence-informed approach for schools, teachers and health educators）、2009」（以下、指針と略す）が開発され、各国の性教育施策に大きな影響を及ぼしており、セクシュアリティ教育の必修化や、その内容の標準化が進んでいる（橋本、2014）。この指針は、5歳から18歳の子どもたちと若者のために要点として踏まえるべき性教育の基本的内容や目標、有用な教材や情報などが示され（田代、2014）、その一部に恋愛を含めた人間関係について学習する内容が含まれている。1956年からすでに、義務教育諸学校でのセクシュアリティ教育が義務化されたスウェーデンでは、障害のある人たちにもわかりやすい教材が豊富に取り揃えられている。さらに、1980年ごろからは、セクシュアリティ教育を実施する際は、生徒たちの意見や要望を踏まえながらプログラムを作り、実践する学校が増えていることが紹介（河東田、2014）されている。

一方、日本の特別支援学校の性教育実施状況に関する先行研究（古賀・御手洗、2015）では、性教育において児童生徒に期待する姿として「周囲の人との好ましい人間関係」をあげた教諭が多かったこと、すなわち、「人との関わり」を重視して性教育が行われていることが示されている。蓮香（2016）は、対人関係と性の支援の実際を紹介しながら、からだの変化に対応して適切な行動の仕方を獲得していけるように支援することは、一人一人の対人関係を豊かにしていくことにつながることで、どのように行動して良いのか困っているのは児童生徒であること、障害のある人の学習の機会として学校が担う役割は大きいことを説明している。知的障害特別支援学校における性教育の実施にあたって、学級担任、養護教諭が主な指導者であることが報告されており（児嶋・越野・大久保、1996；山田・水内、2010）、なかでも、日常的に児童生徒に接する中で、心身の状態を把握し、多様な健康課題に対応する立場にある養護教諭は、児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズを見聞きしやすい立場にあると考えられ、この教育の推進に向けて専門職として果たす役割は大きいと考えられる。

しかしながら、これまで、養護教諭が児童生徒の学習ニーズをどのように捉えて、セクシュアリティ教育に関わっているのかについて、十分に明らかにされてこなかった。また、知的障害児が、性教育において何を学びたいと考えているのか、学んだ性教育についてどう感じているのかなど、そのニーズを明らかにする研究はこれまで行われていない（児嶋、2012）。

このような背景を踏まえ、養護教諭の視点で児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズを捉えることは、この学習ニーズの全体像を把握するには不十分ではあるが、今後のセクシュアリティ教育に関する研究の礎として、また、この教育の普及、推進にとって意義があると考えられる。

そこで、本研究では、知的障害特別支援学校の養護教諭が捉える児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズを明らかにするために、201X年、教育関係の学会において自主シンポジウムで発表した養護教諭3名の語りから、児童生徒の学習ニーズを抽出し、これを整理、分析することによって、セクシュアリティ教育の課題を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

(1) 対象

対象は、201X 年、教育関係の学会において自主シンポジウムで発表した養護教諭 3 名とした。なお、発表では、小学部、中学部、高等部の児童生徒に焦点を当てている。

(2) 手続き

自主シンポジウムでの発表は、セクシュアリティのうち、人との関わりに関する児童生徒の学習ニーズについて語ってもらった。

データの収集は、自主シンポジウムが開催された 201X 年に行い、発表内容と質疑応答の内容を IC レコーダーに録音し、後日、逐語録を作成した。

(3) 分析

分析方法は、事例ーコード・マトリックス（佐藤，2008）による質的データ分析を用い、以下のプロセスを経ながらすすめた。

- 1) 録音データを逐語録として文書化し、その文脈から、「児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズ」に依拠して記述単位を抽出した（セグメント化）。
- 2) 分析の最小単位としての定性的コードを割り当てていった（オープン・コーディング）。
- 3) 上記 2) のコードより抽象度の高い焦点的コードに置き換える作業を行った（焦点的コーディング）。
- 4) 上記 3) のコードから、概念的カテゴリーを作成した。

この 1) ～ 4) のプロセスにおいて、概念的カテゴリーを縦系、対象者である養護教諭を横系とし、そこに、セグメントを要約した焦点的コードを当てはめて、事例ーコード・マトリックスを作成し、情報を整理した。

なお、1 つのデータに 2 つ以上のテーマを含んでいる場合には、データをテーマ毎に分割した。また、同じ人の語りの中で、1 つのテーマが 2 回以上語られても、1 回とカウントした。

学習ニーズの分類については、松久・金森・今枝（2015）を参考にしながら、潜在的学習ニーズ、顕在的学習ニーズに分け、整理した。潜在的学習ニーズには、養護教諭が日常の教育活動の中で、児童生徒にとって「学習が必要とされる課題」、「支援の必要な課題」または「児童生徒自身が困っている課題」としてあげられたもの、顕在的学習ニーズには、児童生徒から「学びたい内容」としてあげられたものをまとめた。松久・金森・今枝（2015）の調査では、学習ニーズを把握するために対象学生に対してアンケート調査を行っているが、本研究では、これを行っていない。なお、本研究では、授業の実践を通じて改めて、養護教諭が児童生徒にとって「学習が必要とされる課題」、「支援の必要な課題」と認識した内容も潜在的学習ニーズとして扱った。

(4) 倫理的配慮

データの収集にあたっては、対象者および自主シンポジウムの参加者に、事前に、会場内の音声録音すること、後日、その内容をプロシーディングとしてまとめることを口頭で説明し、同意を得た。また、取得したデータについては、個人が特定されないよう注意をはらって、コード化処理

等を行った。

(5) 使用する用語について

引用文献中の性教育という表現については、セクシュアリティ教育という言葉に置き換えず、原文のまま用いた。

3. 結果

(1) 対象者の属性

対象者の属性と所属校の規模を表1に示した。対象者の発表時間は平均21分であった。対象者全員が、性教育・セクシュアリティ教育の授業への参加・協力や資料提供、個別の相談等に応じていた。

表1 対象者の属性と所属校の規模

対象	発表時間	特別支援学校勤務歴	養護教諭歴	性教育・セクシュアリティ教育		所属校の規模	
				授業への参加・協力	資料提供、個別の相談	児童生徒数	学部構成
Aさん	18分	5年以上～10年未満	5年以上～10年未満	あり	あり	72	幼稚園・小学部・中学部・高等部
Bさん	21分	5年以上～10年未満	30年以上	あり	あり	109	高等部
Cさん	25分	20年以上～30年未満	30年以上	あり	あり	215	小学部・中学部・高等部

(2) 児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズとして抽出した2つの概念的カテゴリー

「児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズ」についての事例ーコード・マトリックスを表2に示した。

表2 事例ーコード・マトリックス

《概念的カテゴリー》	《社会の中で豊かな人間関係を育む上で学習・支援が必要な内容》	《児童生徒自身が学びたいと語った内容》
Aさん	コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）、自己理解について	
Bさん	恋愛について（多様な性を含む）、コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）、携帯電話などのマナーについて	
Cさん	コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）、Noという力について、自分のからだの一部をさわることにについて	自分のからだのこと、人との関わり方について

知的障害特別支援学校における児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズを養護教諭がどのように捉えているかを分析したところ、《社会の中で豊かな人間関係を育む上で学習・支援が必要な内容》、《児童生徒自身が学びたいと語った内容》の2つの概念的カテゴリーが抽出された。概念的カテゴリーそれぞれについて、表3、表6に示す。表3、表6では、焦点的コードの通し番号として、①～⑧の番号をふっている。また、根拠となる語りについて一部抜粋したものを、表4、表5、表7に示し、養護教諭の語りを「」内に、そのうち、（）内に示された文言は、発言前後の文脈に基づいた、補足説明を記した。

以下に、抽出された概念的カテゴリーについての説明を行う。

概念的カテゴリーは《 》，焦点的コードは【 】, 定性的コードは < >, 対象者の語りは「」で記した。なお、定性的コード横のカッコ内の数字は、抽出件数を表す。

1) 潜在的学習ニーズ《社会の中で豊かな人間関係を育む上で学習・支援が必要な内容》

養護教諭の語りにみる《社会の中で豊かな人間関係を育む上で学習・支援が必要な内容》を、表3に示した。この概念的カテゴリーは、養護教諭が日常の教育活動の中で、児童生徒にとって「学習が必要とされる課題」、「支援の必要な課題」または「児童生徒自身が困っている課題」としてあげられたもの、すなわち、潜在的学習ニーズである。具体的には、学校における児童生徒の日常生活の実態、学習後の児童生徒や周囲の反応、保健室に寄せられる相談などから捉えた学習ニーズおよび将来を見据えた上で学習・支援が必要な内容があげられた。この概念的カテゴリーは、6つの焦点的コード【①恋愛について（多様な性を含む）】、【②コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）】、【③No という力について】、【④携帯電話などのマナーについて】、【⑤自分のからだの一部をさわることにについて】、【⑥自己理解について】、16の定性的コード<生徒自身が恋愛について悩んでいる> (1)、<別れることが難しい> (1)、<同性同士のカップルもいる> (1)、<おつきあいの図を使った個別指導により、生徒が落ち着いた> (1)、<学習後、性を肯定的に受け止めていた> (1)、<学習後、多様な性の在り方を肯定的に受け止めていた> (1)、<学習後、安心感につながった> (1)、<学習が、とてもタイムリーであったという感想があった> (1)、<対人距離の近さ> (3)、<担任、保護者が相談の上、友人との距離やルールについて学習の目標にあげた> (1)、<（人に）抱きつく> (1)、<背後から背中を叩いて話しかける> (1)、<嫌だといえない> (1)、<携帯電話等によるトラブルが多くなっている> (1)、<人前でペニスを触る> (1)、<高等部段階での学習では、自己理解を大事にしている> (1) からなる。

①養護教諭が共通してあげた学習ニーズ

3名の養護教諭に共通した学習ニーズは、<対人距離の近さ>、つまり、【②コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）】であった。<対人距離の近さ>についての根拠となる語りを表4に示した。「距離感の課題がなかなか難しいお子さんだったりして、この、抱きつくとか、後ろから背中を叩いて、話しかけるとか」、「友達との正しい距離やルールを守る、というような目標を、担任、保護者の方も含めて立てさせていただきました。」(Aさん)、「つきあっているのかなと思わせるくらいの距離感の友達同士の姿もあります。」(Bさん)という実態や、「距離が近すぎるっていう、それを何とか伝えたい」(Cさん)という思いが語られていた。

表3 潜在的学習ニーズ

《概念的カテゴリー》	【焦点的コード】	定性的コード
《社会の中で豊かな人間関係を育む上で学習・支援が必要な内容》	①恋愛について（多様な性を含む）	＜生徒自身が恋愛について悩んでいる＞（1）
		＜別れることが難しい＞（1）
		＜同性同士のカップルもいる＞（1）
		＜おつきあいの図を使った個別指導により、生徒が落ち着いた＞（1）
		＜学習後、性を肯定的に受け止めていた＞（1）
		＜学習後、多様な性の在り方を肯定的に受け止めていた＞（1）
		＜学習後、安心感につながった＞（1）
	②コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）	＜学習が、とてもタイムリーであったという感想があった＞（1）
		＜対人距離の近さ＞（3）
		＜担任、保護者が相談の上、友人との距離やルールについて学習の目標にあげた＞（1）
		＜（人に）抱きつく＞（1）
	③Noという力について	＜背後から背中を叩いて話しかける＞（1）
		＜嫌だといえない＞（1）
		＜携帯電話等によるトラブルが多くなっている＞（1）
	④携帯電話などのマナーについて	
	⑤自分のからだの一部をさわることにについて	＜人前でペニスを触る＞（1）
	⑥自己理解について	＜高等部段階での学習では、自己理解を大事にしている＞（1）

表4 ＜対人距離の近さ＞についての詳細

根拠となる語り（抜粋）
「（中学部に入学して）集団が少し大きくなって、お友達関係がすごく広がって、仲良くしたいという気持ちで、つい、べたべた、あの、接してしまったりするお子さんがおります。そのところで、目標として、友達との正しい距離やルールを守る、というような目標を、担任、保護者の方も含めて立てさせていただきました。」「男の子に、こう、近づいてしまったりとか、距離感の課題がなかなか難しいお子さんだったりして、この、抱きつくとか、後ろから背中を叩いて、話しかけるとか、こういうところを日常の場面で、気になる様子だとかの行動を、あの、授業でどういう風にすれば、適切なやり取りはどうかというのを、ワークシートで」（Aさん） 「つきあっているのかなと思わせるくらいの距離感の友達同士の姿もあります。」（Bさん） 「距離が近すぎるっていう、それを何とか伝えたいんだってということで、あの、こういう教材をいかがかなと思って作った」「距離感っていうのもね、なかなか難しくって」（Cさん）

②授業の実践を通じて再認識された学習ニーズ

＜生徒自身が恋愛について悩んでいる＞についての根拠となる語りを表5に示した。Bさんは、「思いがうまく伝えられなくて、いらいらして、（体育館や掃除用具入れのロッカーの）ドアをたたいてきたり、（家庭で、友人と）夜中まで長電話をして、家族から叱られたとか、別れたはずなのに、別れたくないとしつこく言ってくるとか、実習に行っている間に、いつの間にか違う人と付き合っていた」といった保健室に持ち込まれる様々な相談から＜生徒自身が恋愛について悩んでいる＞姿や、＜同性同士のカップルもいる＞実態に直面しており、こうした背景から、【①恋愛について（多様な

表5 <生徒自身が恋愛について悩んでいる>についての詳細

根拠となる語り（抜粋）
「保健室には様々な恋愛に関する相談が持ち込まれます。思いがうまく伝えられなくて、いらいらして、（体育館や掃除用具入れのロッカーの）ドアをたたいてきたり、（家庭で、友人と）夜中まで長電話をして、家族から叱られたとか、別れたはずなのに、別れたくないと、しつこく言ってくるとか、実習に行っている間に、いつの間にか違う人と付き合っていたとか」「（恋愛やおつきあいの授業後に）『先生方の気持ちを聞いてよかったけど、正直言って、何がわかんねんって思った。確かに、深く考えるのは、だめだけど、それほどまでに愛している人なんだからほっといてほしい。何もできないなら。』という風に感想を書してくれた子がいた（中略）2年生になってから、自分を大事にできていないなっていうような行動が何度かあって、（中略）今、養護教諭2人が窓口となって、支えています。」（Bさん）

性を含む）】を児童生徒の学習ニーズと捉え、担任と協力して恋愛やおつきあいの授業を実践していた。さらには、＜学習後、多様な性の在り方を肯定的に受け止めていた＞、＜学習後、安心感につながった＞などの学習後の児童生徒や周囲の反応から、学習ニーズを再確認していた。このように、「児童生徒自身が困っている課題」に加え、授業の実践を通じて改めて、養護教諭が児童生徒にとって「学習が必要とされる課題」、「支援の必要な課題」と認識した内容が含まれていた。

また、「（恋愛やおつきあいの授業後に）『先生方の気持ちを聞いてよかったけど、正直言って、何がわかんねんって思った。確かに、深く考えるのは、だめだけど、それほどまでに愛している人なんだからほっといてほしい。何もできないなら。』という風に感想を書いていた子がいた（中略）2年生になってから、自分を大事にできていないなっていうような行動が何度かあって、（中略）今、養護教諭2人が窓口となって、支えています。」（Bさん）の語りにあるように、学習の後の児童生徒の感想から、後の個別の健康相談活動につながったケースもあった。

2) 顕在的ニーズ《児童生徒自身が学びたいと語った内容》

養護教諭の語りにみる《児童生徒自身が学びたいと語った内容》を、表6に示した。

この概念的カテゴリーは、児童生徒から「学びたい内容」としてあげられたもの、すなわち、顕在的学習ニーズである。この概念的カテゴリーは、2つの焦点的コード【⑦自分のからだのこと】、【⑧人との関わり方について】、1つの定性的コード＜（虹の輪の学習後）こういうことが学びたかった＞（1）からなる。顕在的学習ニーズとして《児童生徒自身が学びたいと語った内容》についてあげたのは、Cさん1名であった。＜（虹の輪の学習後）こういうことが学びたかった＞についての根拠となる語りを表7に示した。

表6 顕在的学習ニーズ

《概念的カテゴリー》	【焦点的コード】	定性的コード
《児童生徒自身が学びたいと語った内容》	⑦自分のからだのこと ⑧人との関わり方について	＜（虹の輪の学習後）こういうことが学びたかった＞（1）

表 7 <（虹の輪の学習後）こういうことが学びたかった>についての詳細

根拠となる語り（抜粋）

「ある生徒がですね、スカートめくりしてたんですね、（中略）クラスメイトにスカートめくりしたもんだから、それを怒られてもわかんなかったみたいで、で、これ（虹の輪）を学習した直後にですね、『おれは、こういうことが勉強したかったんだよ』って一言いったので、あっ、これは、自分の体のこととか、こういう人との関わり方についてですね、勉強したいと思っているんだっていう風に」（Cさん）

4. 考察

本研究の目的は、知的障害特別支援学校の養護教諭が捉える児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズを明らかにするために、201X年、教育関係の学会において自主シンポジウムで発表した養護教諭3名の語りから、児童生徒の学習ニーズを抽出し、これを整理、分析することによって、セクシュアリティ教育の課題を明らかにすることであった。以下に、「多様な潜在的学習ニーズ」、「顕在的学習ニーズの少なさ」の2点から考察する。

(1) 多様な潜在的学習ニーズ

本研究の結果、【①恋愛について（多様な性を含む）】、【②コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）】、【③Noという力について】などの多様な潜在的学習ニーズがあげられた。学校における日常的な関わりや教諭の行う授業への参加・協力の中で、養護教諭は、児童生徒の潜在的学習ニーズを十分に把握していた。多様な潜在的学習ニーズのうち、「養護教諭が共通してあげた学習ニーズ」、「授業の実践を通じて再認識された学習ニーズ」の2つの視点から実態と課題を整理する。

1つ目の「養護教諭が共通してあげた学習ニーズ」には、<対人距離の近さ>、つまり、【②コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）】があがり、学校において重要な学習ニーズと捉えられていることが推察された。知的障害を主とする国立大学法人の附属特別支援学校におけるセクシュアリティ教育に関する実態調査（高田・郷間，2014）では、恋愛や交際の授業の実施状況は、教諭35.1%、養護教諭25.0%で、そのうち8割が「自分と相手との距離（パーソナル・スペース）や人との関わり方について」を授業で取り扱っており、最も多かったことと照らし合わせると、同様の結果が得られ、先行研究を支持するものであった。

障害児のパーソナル・スペースに関する研究（山田・今塩屋，2001）では、通常学級118名と特殊学級および通級指導教室60名の児童を対象に、stop-distance法を用いて、あいさつ時の対人距離を測定した結果、知的障害児は、健常児に比べて対人距離が短いこと、障害児のパーソナル・スペースは、社会的成熟との関連があることを指摘している。この研究では、知的障害児の対人距離の短さに関して、反応を決定するまでに、被接近者の顔を見る、接近方法を確認する、歩いて接近する、立ち止まる、あいさつをするといった種々の情報を処理する必要がある、こうした一連の行動を限られた空間の移動中に終結しなければならないため、結果として、知的障害児は止まらずに、対人距離が短くなってしまうのではないかと説明している。また、同研究では、交流時数が増えると障害児の対人距離は長くなり、健常児のパーソナル・スペースに近づくことを明らかにしている。このことから、知的障害のある児童生徒の認知的側面、行動的側面に効果的に働きかけるための学習・支援の在り方を今後、十分に検討していく必要があると考えられる。

2つ目の「授業の実践を通じて再認識された学習ニーズ」には、【①恋愛について（多様な性を含む）】

があげられたが、児童生徒の悩み・困り感を「受容」する過程、および、実態を踏まえて授業を実践し、その後の児童生徒や周囲の反応を「受容」する過程の中で、再認識された学習ニーズといえるだろう。〈おつきあいの図を使った個別指導により、生徒が落ち着いた〉では、図1のおつきあいの図¹を参考に独自に作成した図を用いた個別指導を行っていた。さまざまな恋の形や生き方があることについては、言葉だけで説明するよりも、図という視覚的ツールを用いて説明した方が理解がしやすくなり、生徒自身が納得した結果、落ち着いていったのではないかと考えられる。また、学習の後の個別の健康相談活動につながっているケースもあったことから、学校における日常的な関わりや教諭の行う授業への参加・協力の中で、養護教諭が専門的な立場を生かしながら、セクシュアリティ教育に関わる意義は大きいと考えられる。

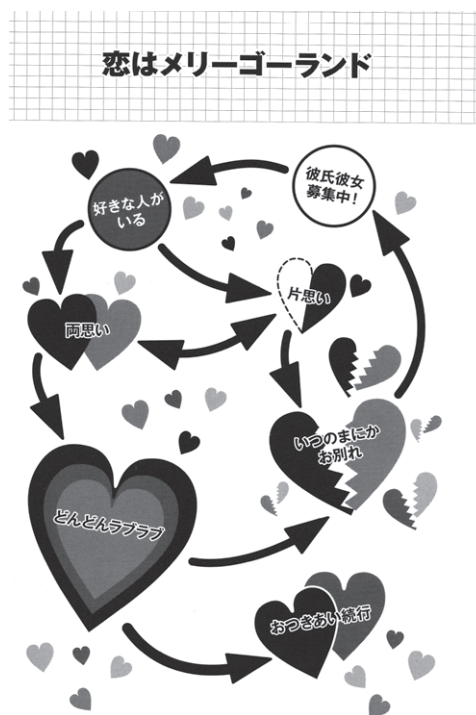


図1 おつきあいの図

引用元：「人間と性」教育研究協議会（2012）

（2）顕在的学習ニーズの少なさ

【⑦自分のからだのこと】、【⑧人との関わり方について】の顕在的学習ニーズをあげたのは1名と少なかった。松久・金森・今枝（2015）の調査では、学習ニーズを把握するために対象学生に対してアンケート調査を行っているが、本研究では、これを行っていない。その理由は、日常的に児童生徒に接する中で、心身の状態を把握し、多様な健康課題に対応する立場にあり、実際に、セクシュアリティ教育の授業への参加・協力を行っている養護教諭の視点で、児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズを捉えることに焦点を当てているからである。養護教諭は、児童生徒のセクシュアリティの学習ニーズを見聞きしやすい立場にあると考えられ、顕在的学習ニーズが複数あげられるのではないかと予想されたが、実際は、少なかった。この結果から、学校における日常的な関わりや教諭の行う授

業への参加・協力の中だけでは、児童生徒のセクシュアリティの顕在的学習ニーズは十分にひろえていない可能性が示唆された。知的障害特別支援学校における恋愛についての学習の実践報告（綿引・村瀬・北潟，2011）では、多くの生徒にとって関心の高いテーマであり、学習に対し積極的に取り組む姿勢がみられたこと、授業から1年後、教員に「(授業は) 今年はないの?」と尋ねる様子などが紹介されている。「(授業は) 今年はないの?」という生徒の語りは、授業を待望している姿であり、顕在的学習ニーズと捉えることができる。生徒にとって、学習に対する期待感をもて、魅力のある授業を企画していくことも大切である。筆者らは、これまで、知的障害特別支援学校の教諭や養護教諭とセクシュアリティ教育に関する交流をする中で、セクシュアリティ教育のすすめ方については、児童生徒の個別の課題に応じて、教員が学習テーマを決め、課題別や発達段階別に授業を行っていることを見聞きしてきた。今後は、児童生徒が積極的に学びを選択できるような学習環境の設定、多様な学びの補償、日常的にセクシュアリティについて語り合える学校の雰囲気などの調整を図りながら、児童生徒のニーズにそった学習・支援を検討していく必要があると考えられる。

近年、インタビュー調査などから、知的障害のある人のセクシュアリティについて当事者の声が明らかにされるようになってきた（杉崎，2009;新藤，2013）。古井（2015）は、知的障害のある人が「語れない」、「語らない」理由は、知的能力や言語的コミュニケーション能力のみにあるのではなく、調査者との相互行為の在り様や社会的要因にもあると理解しておくことが重要であると述べている。また、これまで、知的障害のある人のインタビューは、対象者の言語的コミュニケーションの有無で選定されていた点を指摘し、より多くの知的障害のある人の「声」が論文として公表されるために、言語のみではなく、文字やイラスト、写真といった視覚的ツールがインタビューで使用されること、また、対象者が希望する場合における支援者の同席によるインタビューなどが、今後、期待されると述べている。こうしたことを踏まえた上で、今後は、児童生徒を対象にしたインタビュー調査やアンケート調査によって、顕在的学習ニーズをより明らかにし、児童生徒のニーズにそった学習・支援を検討していく必要がある。

5. 本研究の限界と課題

分析の対象とした自主シンポジウムで発表した養護教諭3名の語りでは、対象者の発表時間は平均21分と限られた時間内に、所属校の特色や児童生徒の実態、「人との関わり」に関する児童生徒の学習ニーズを養護教諭がどのように捉えているか、セクシュアリティ教育の実践上の困難や今後の展望などを報告しており、「人との関わり」に関する児童生徒の学習ニーズについて、十分に語りきれない部分もあると思われる。また、本研究では、アンケート等による児童生徒への学習ニーズの調査は行っていないため、顕在的学習ニーズを十分に明らかにできていない。今後は、顕在的学習ニーズをより明らかにし、児童生徒のニーズにそった学習・支援を検討していく必要がある。

6. 結論

本研究では、冒頭の自主シンポジウムで発表した養護教諭3名の語りから、児童生徒の学習ニーズ

を抽出し、これを整理、分析することによって、セクシュアリティ教育の課題を明らかにすることを目的とした。

結果は次のとおりであった。

1. 養護教諭は、【①恋愛について（多様な性を含む）】、【②コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）】、【③ No という力について】などの多様な潜在的学習ニーズをあげていた。
2. 3名の養護教諭に共通した学習ニーズは、＜対人距離の近さ＞、すなわち、【②コミュニケーションスキルについて（対人距離を含む）】であった。
3. 養護教諭の行う児童生徒への日常的な関わりや教諭の行う授業への参加・協力の中では、児童生徒の潜在的学習ニーズを把握できても、児童生徒の顕在的学習ニーズを十分にひろえない可能性が考えられた。

以上より、今後は、児童生徒を対象にしたインタビュー調査やアンケート調査により顕在的学習ニーズをより明らかにし、児童生徒のニーズにそった学習・支援を検討していく必要がある。

<謝辞> 本研究にご協力いただいた自主シンポジウム参加者の皆さまに深く感謝いたします。本研究は、JSPS 科研費、JP16H00267 の助成を受けたものです。

註

- ¹ 「おつきあいの図」（図1）とは、片思い、両思い、パートナー募集中、シングルライフといろいろな恋の形や生き方があることを図で示した教材で“人間と性”教育研究協議会（2012）で紹介されたものである。たとえ、うまくいかない恋があっても、そこですべてが終わりではないことに気づき、自分の在り方、生き方、他者との関わり方を考えていく学習である。

参考文献

- 古井克憲（2015）「知的障害のある人を対象としたインタビュー調査実施に当たっての留意点」『和歌山大学教育学部紀要教育科学』, 65, 141-150.
- 橋本紀子（2014）「諸外国と日本の性教育（橋本紀子, 関口久志, 田代美江子編）」『ハタチまでに知っておきたい性のこと』, 大月書店, 22-30.
- 蓮香美園（2016）「青年期を支える保護者・教員への支援－対人関係と性の支援のために－」『特別支援教育研究』, 711, 16-19.
- International Technical Guidance on Sexuality Education-An evidence-informed approach for schools, teachers and health educators（2009）Available at : <http://unesdoc.unesco.org/images/0018/001832/183281e.pdf>
Accessed July 11, 2017
- 河東田博（2014）「ハンディキャップとセクシュアリティ」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』, 15, 67-77.
- 古賀精治・御手洗沙織（2015）「特別支援学校の性教育における指導内容と児童生徒に期待する姿」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』, 37, 115-128.

- 児嶋芳郎・越野和之・大久保哲夫（1996）「知的障害児の性教育に関する一考察－養護学校全国調査より－」『奈良教育大学紀要』, 45, 201-217.
- 児嶋芳郎（2012）「知的障害児の性教育に関する研究の動向」『特殊教育学研究』, 50, 313-321.
- 松久眞実・金森裕治・今枝史雄（2015）「発達障害のある学生の学習ニーズに基づいた講義内容の作成に関する研究（第Ⅰ報）－高等教育機関における実施をめざして－」『大阪教育大学紀要』, 63, 37-51.
- 佐藤 郁哉（2008）『質的データ分析法－原理・方法・実践』, 新曜社.
- 新藤こずえ（2013）『知的障害者と自立－青年期・成人期におけるライフコースのために』, 生活書院, 112-192.
- 杉崎敬（2009）「知的障害当事者の＜生き様＞から見える多様なセクシュアリティの形－知的障害と共に生きる＜彼ら／彼女らなり＞の＜リアリティ＞とは何か」『障害学会第6回大会報告要旨』, Available at : <http://www.arsvi.com/2000/0909sk.htm> Accessed February 9, 2017
- 高田千鶴・郷間英世（2014）「知的障害特別支援学校におけるセクシュアリティ教育に関する教員の意識－『恋愛や異性交際』をテーマにした授業に着目して－」『第61回一般社団法人日本学校保健学会学術大会講演集』, 239.
- 田代美江子（2014）「性教育をめぐる国際的な動向（橋本紀子，関口久志，田代美江子編）」『ハタチまでに知っておきたい性のこと』, 大月書店, 16-22.
- 綿引伴子・村瀬真理子・北潟理美（2011）「特別支援学校における“恋愛学習”－授業案の検討と実践－」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』, 3, 75-85.
- 山田晃生・水内豊和（2010）「特別支援学校における性教育に対する意識と実態－国立大学法人の附属特別支援学校の教諭ならびに養護教諭を対象とした質問紙調査から－」『富山大学人間発達科学部紀要』, 5, 49-64.
- 山田浩司・今塩屋隼男（2001）「障害児のパーソナル・スペースに関する研究－通常学級児童と特殊学級および通級指導教室児童との比較－」『特殊教育学研究』, 38, 119-127.

引用画像

- “人間と性” 教育研究協議会（2012）『季刊セクシュアリティ』, 55, エイデル研究所, 88-89.